

いま、子どもたちは

「教育相談」という仕事

高野久美子

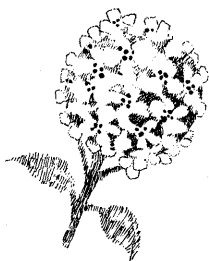
私は、十数年心理援助職として、いくつかの相談機関で何らかの困難を抱えた子どもたちとその保護者の方の相談を担当してきました。それぞれの悩みや課題を持って、いろいろな年齢の子どもたちがお母さんやお父さんとともに相談室を訪れます。相談のあり方は多種多様ですが、基本は子どもたちの問題や保護者の方の悩みを「相談員が解決してあげ

る」のではなく、子どもたちがもと持っている「成長する力」「生きる力」が十分に発揮できるよう相談員がさまざまな方法で援助すること、また保護者の方が自分自身で問題の整理をしたり、気持ちの落ち着きを取り戻して解決に当たることができるようお手伝いするという姿勢です。

相談によって内容は千差万別なので、プレイセラ

ピー（遊戯療法）や面接相談について、一言で説明するのは難しいのですが、たとえば、小学生くらいまでの子どもたちは、担当の相談員との信頼関係をベースに、安心できる空間・時間（相談室のプレイルームなど）のなかで、遊びを通して言葉で表すことができない気持ちやこころの内側を表現します。その過程で子ども自ら自信を回復していったり、生きるエネルギーを蓄えて、より成長した姿で現実の世界に戻って行きます。中学生以上の子どものなかには、ゲームやパズル、料理、手芸、スポーツなどを媒介しながら信頼できる人（相談員）と「ともに楽しむ」「ともに時を過ごす」という経験をしながら内省するきっかけを得たり、その思いを相談員に語りながら思春期の混乱から一歩ずつ抜け出ていく子どもたちも多いようです。また、面接というかたちで、自分の思いを語り自分自身の気持ちや考えの整理をしていくことが問題解決につながることも少なくありません。

保護者の方の相談もさまざまです。相談室を訪れるきっかけは、子どもの不登校だったり集団不適応だったり、いわゆる「困った問題行動」がほとんどです。今すぐ解決策を教えてほしい、という方やいろいろがんばってみただけだめだった、と疲労困憊の様子の方、親としてどうしていいのかわからない、と困惑しきった方もいらつしやいます。（発達上の課題のある場合は少し対応に違いがありますが）必要に応じて具体的なアドバイスも行いますが、もちろんですが、保護者の方にこれまで努力されてきたことをねぎらった上で「相談員が解決するということではなく、何が最善か親御さんと一緒に考えて行きたい。なによりお子さんの一番そばにいらつしやるのはお母さんやお父さんですから」とお伝えするようにしてい



ます。

「何も教えてくれない」「こつちの話を聞いているだけ」と不満を感じられる方も、一回五十分の面接を定期的（頻度はケースによって異なる）に行う中で、相談員からの質問や確認、感想を受け答えるうちに保護者の方が子どもについて新たな見方を試してみたり、思いもかけなかった自分自身の気持ちに自ら気づき、子どもとの対応が自然と変容していくことが多いのです。そうした変化に子どもたちは敏感に反応し、子ども自身のありようも変わってくるといことが少なくありません。ここでは、ある保護者の相談を例にとつて、教育相談の仕事の一部をご紹介しますと思います。

私がある相談機関で担当したお母さんの相談事例（プライバシー保護のために内容は改変してあります）は次のようなものでした。そのお子さん（A君）は男の子でしたが、乳児のころから夜泣きが激しく、いくらあやしても泣き止まない、歩くように

なつてからは、どこに飛び出していつてしまうかわからないので三歳近くまで外出はおんぶだった、とつびな行動が多かったので、次に何をやるかいつもハラハラしていたということでした。幼稚園に入っても落ち着かないうえに友達とうまく遊べずケンカしてしまうことが頻繁で、一斉保育にはほとんど入ることができなかったということです。お母さんは、この状態をなんとかしたい一心で、何かあるたびに友達を家に大勢呼んでパーティを開いたり、空手クラブ・体操教室・幼児教室に通わせたり、いくつもの病院に通つて検査を受けたり相談をしてきたということでした。

幼稚園年長組の時に、就学を前に継続的な相談をしたいということで、当時私が所属していた相談機関に相談を申し込まれました。お母さんの面接を私が担当し、ほかの相談者がA君の療育を担当しました。「なんて大変な思いをされてきたことか」と思いつつ生育歴を伺っていたのですが、気になること

がいくつか出てきました。そのうちのひとつが、一週間のA君のスケジュールでした。そのお母さんは、A君に一週間のうちほとんど毎日を習い事や相談に通わせていて、ゆつくりお母さんと二人で過ごす時間がとても少なかったのです。お母さんの苦労を労りつつも、何回かの面接でそのことを話題にしたあとでお母さんは「専門家の手にAを預けているほうが自分が安心できた」「今まで私は、友だちともうまく遊べずつらい思いをしているAをかかわいそうと思っていたのではなく、こんな子を持った自分がかわいそう、と思っていた。でも、いまは、この子自身が一番大変な思いをしているんだ、と実感できる」と語り、A君に対する自分の気持ちを見直し始めました。「Aをかわいと思えない自分に対する負い目」もあって、習い事をさせていたというお母さんは、少しずつA君という時間を長く取るようになり、かわいらしい面も発見するようになりました。いくつかの紆余曲折を経て、お母さんとの関係

が変化してくるとA君も感情を少しずつコントロールできるようになり遊ぶ友達も数人できました。一方、A君自身に発達上の偏りがあることもわかり、学校などの集団生活を送ることは難しい面もあったので小学校就学後も療育は継続し（お母さんの相談は不定期）、小さな波風はありながらも、A君なりに毎日を楽しく過ごすことができるようになりました。

この事例は、A君に発達の偏りというハンディはあったものの、お母さんが子どもに対する自分の気持ちに自ら向き合ったときに、発達上のハンディの上に乗せられていたメンタルな問題がある程度払拭することができたケースです。こうした保護者自身が自分では見つけることが辛い内面の声や思いに耳を傾けたり、向き合うためのお手伝いをするのも、教育相談の大きな仕事のひとつのようになってきています。

（文京区教育センター）